与格交替における構文選択
――中学校英語教科書――

山　本　和　之

1．はじめに

英語の与格交替における構文選択（二重目的語構文か前置詞構文かの選択）には、構文が持つ意味構造、情報構造からの要請、関与する名詞句の重さ、動詞の語用論的・フレーム的特徴等の要因が関与している。しかし、英語習得の中学校レベルにおいては、この構文選択の要因は単純化され、分かりやすい形で構文選択が行われていると思われる。この小論は、中学校英語教科書において、どういう要因が与格交替の構文選択を左右しているか、実際の用例によって考察し、初期英語教育に役立てることにある。今回参照した中学校英語教科書は山口県で使われている3種の中学校英語教科書 *New Crown, New Horizon, Sunshine*（各1，2，3）である。

2．形違えば意味異なる：英語の与格交替構文

与格交替について、下記（1a）と（1b）は意味が同じであるが、（2a）と（2b）では意味が異なっていて、（2a）はジョンが言語学を身に付けたことを imply or entail するのに対して、（2b）の方はメアリーがジョンに言語学を身に付けさせることができたかどうかについては何も言っていないという Green（1974：157）の見解は、そのまま受け取っていいかは別にして、情報構造とは別の、構文自体の意味構造の違いを示すものとして興味深い指摘であった。

（1）a. Mary gave John an apple.
　　b. Mary gave an apple to John.
（2）a. Mary taught John linguistics.
　　b. Mary taught linguistics to John.

その後、英語の与格交替について、二重目的語構文の方は間接目的語と直接目的語との間に have 関係が生じる（あるいは生じることを含意する）のに対して、前置詞 TO 構文の方は移動

のみを表す（従って have 関係が生じるかどうかについては何も言っていない）、従って両者意味が異なる、という主張が割りと素直に受け入れられて一般化したのは、ひとつには、Goldberg (1995) 等の、構文に意味ありとする構文文法的な考え方が受け入れられてきたこと、動詞のすぐうしろに来るものには動詞の影響が強く与えられる（（2 a）を例にとれば taught の結果 John に言語学を習得するという変化が生じること）、つまり近くのものとは関係が強くなり、遠くのものとは関係がうすくなるという認知言語学的な考え方が後押ししていたのではないかと思う（メトニミーは隣接要素間の関連の強さに基づいている）。当時、個人的には、cost, envy, forgive のような動詞が二重目的語構文では使われるが対応する交替形を持たないこともうまく説明できると思った（いずれも間接目的語とシーム（theme）項との間に have 関係が成立していることが前提となっている）。

Green (1974) の示した（1）（2）の用例は、いくつかの検討事項を提供するものであった。例えば、どちらの構文で使っても文の意味に違いをもたらさない give 型と意味の違いが生じる teach 型には、それぞれどんな動詞があって両者の違いは何に起因しているのか、（2 a）が言語学を身に付けたことを imply or entail するとしているが、どういう動詞のどういう状況のときに imply し、どういうときに entail するのか、また teach は give と違って実体のあるモノが移動することはないが、その違いは移行達成の含意と関係があるのか、（2 a）と（2 b）の概念構造の違いをどのように表示するのか、さらに、二重目的語構文の持つ含意はどの程度構文の選択に影響を与えるのか、といった疑問である。Green (1974) 以降も二重目的語構文の考察は進められ、最近でも個々の動詞の意味上の特色を前面にだしたアプローチによって洗い直しがなされ、このような疑問に対する解答を含んだ提案も行われている。[1] なお、英語母国語話者のみんなが与格交替の二つの構文に意味の差を認めているわけではない。[2]

本稿で対象としている二重目的語構文とその対応形としての前置詞構文は、間接目的語または前置詞の目的語が受け手（リシピアント）の場合であって、受益者（ベナファクティヴ／ベナフィシエリ）の場合ではない。受益者構文の場合は、シーム（theme）項の移行そのものは意味構造の中に含まれてない。従って、前置詞句の前置詞として for をとるような動詞、あるいは for をとるような使われ方をした場合の動詞は除外されている。中学校英語の段階でも、間接目的語が受け手と受益者の 2 種類の二重目的語構文が出てくるが、両者を区別することはしていない。今回取り上げた 3 種の中学校英語教科書にも、buy, cook, make, sing などの二重目的語構文が出てくるが、これらは本稿の考察の対象にはしていないので、例文として取り上げてはいない。

3．二重目的語構文の導入と関連構文

二重目的語構文は、中学校学習指導要領（第 2 章各教科第 9 節外国語）では、文法事項の文構

造のところで、いわゆる5文型の一つとして、＜[主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語] のうち、(a) 主語＋動詞＋間接目的語＋名詞/代名詞、(b) 主語＋動詞＋間接目的語＋how（など）to 不定詞＞、のように説明されている。前置詞構文の方は文型としては [主語＋動詞＋目的語] の中に繰り込まれると思われる。指導要領では、この二つの構文の関連性を扱うことは求めてはいないが、教科書には二つの構文の対応関係を示しているものもある。[3] 対応関係を示されることによって、生徒は概略同じことを言うのに二つの言い方があることを知るが、ある場面でどちらの文で自分の言いたいことを発信したらいいのかは分からない。おそらくその後も、いざ発信するさいにどちらを使うかという構文選択についての指導を受けることはないと思われる。構文の定着だけで精一杯というのが現実である。なお、文型としての二重目的語構文の導入は、まったく独立した新しい文型として導入することもできるが、すでに学習している目的語を一つだけ持った文と関連付けて導入するのも、中学生には分かりやすい方法だと思う。具体的に言えば、I will write a letter のような [主語+動詞+目的語] 構文と関連付けて、これに「誰に」を付け加えて言いたいときに、動詞と目的語との間に「誰に」(e.g. him) を入れる、という指導である。実際にこのような指導を導入している教科書もあったが、付録の英文法のまとめの方に回されていて、本体の方では導入されていなかった。[4] なお、目的語がリシピアント項のものを基にして (e.g. He teaches me.)、それにシーム項を加えて二重目的語構文を派生させるのは、基になる文がおかしいあるいは普通には使われないものがあるので、一般性に欠ける（例えば*He sold Mary.「メアリーに売った」/ *He gave her.「彼女にあげた」)。show, teach, tell などは間接目的語を省略することも直接目的語を省略することも可能な動詞であるが、通常二重目的語構文の直接目的語は必須であるのに対して、間接目的語は省略できる場合が多い (e.g. He lent (them) his car.)。[5] ついでながら、「誰に」を付け加える（間接目的語を挿入する）やり方で二重目的語構文を導入するときには、同時に前置詞を使っての付け加え方（前置詞構文）も示した方が、二重目的語構文と前置詞構文の対応関係も同時に示せるという利点はある。しかし中学校段階では二つの構文を同時に導入ないしは提示するのは生徒への荷が重過ぎるということと、以下触れるように、二つの目的語の間の相対的‘重さ’や情報の新旧に配慮した例文で行わなければならないということがあるので、先生方への負担も大きくなる。

4．与格交替における構文選択の基準

二重目的語構文と前置詞構文の二つが許される場合、どちらを使用するかは主として情報構造や語句の重さから考察されてきた。旧情報—新情報、end-focus、end-weight のようなお馴染みの用語で説明するのが一般的であったように思う。[6] どちらの構文を選ぶかによって文末に配置する語句が異なってくるので、構文の選択は、情報の流れ、焦点、重さに関する話者の意図や判

断と深く関わることになる。なお、end-focus と end-weight は対立する場合もあるが、協働していることが多い。[7] Arnold et al. (2000) は、コーパス分析と実験結果から、heaviness（文法）と newness（情報）が同時的に且つ独立して与格交替（give）の語順に影響を与え、話し手（文の産出）と聞き手（文の理解））の両方に関係していることを考察している。どのようなときに light-before-heavy と old-before-new のうちのどちらの影響が相対的に大きくなるかについても触れられていて、両者の影響を別個ではなく、一緒に検討している。

情報の新旧や語句の重さからの説明は、文末位置に重きをおいて構文選択を説明するものであった。これに対して、二重目的語構文は間接目的語と直接目的語との間に所有関係を成り立たせ（あるいは含意し）、前置詞構文の方はシーム項の移行のみを表す、というのは、動詞直後の位置に、つまり動詞の影響に重きをおいた見方だということができる。そのさい、文末位置と違って、動詞自体が持つ意味的特徴も関与することになる。問題は、情報の新旧や語句の重さの方は、冠詞や代名詞、語句の長さ・複雑さといった、使われている語句の形を見れば判断できるが、リシピアント項とシーム項との間に have 関係がある（あるいは含意されている）かどうかというのは、実際のところ用例から確かめるのが困難なことである。

5．移動の隣接性・直接性と二重目的語構文

Green (1974) が示した gave と taught の違いは、移行のフレーム要素における異なりを示していると思われる。Rappaport Hovav & Levin (2008) は、本稿で使っている「移動の隣接性（直接性）」という見方で整理はしていないが、与格交替動詞を、シーム項の移動の成就という点から分析し、移動の成功（成就）の可能性は、動詞自体が決めることであって、構文によって決まってくるのではない、構文選択そのものは大方のところ情報構造と語句の重さによって行われるが、それらが決定的な役割を果たしていないときにだけ（つまりどちらの構文も使えるようなときにだけ）、二重目的語構文を選択すると、successful transfer の含意が生まれると考えた。しかし問題は、どちらの構文も使えるときに（この判断自体も難しい判断であるが）、果たして話者が移動の成就を含意して（発話意図）、二重目的語構文の方を選んだかどうかは確認しにくいのである。

移動のフレームには、移動を引き起こす人（物）、移動を引き起こす手段、移動するものの種類、移動までの時間、移動の空間的・時間的距離、到達点の種類（人か場所か）といった、もろもろの要素が関与しており、動詞によって、それらの取り込み方が異なっている。したがって、シーム項の移動成就の含意の強さも、動詞によって異なってくることになる。大雑把な言い方をすれば、移動が隣接的（直接的）であればあるほど、移動物が相手方の手に入る可能性は高くなると言える。例えば、移動の距離（隣接性）から言えば、give や tell などは、通常シーム項の

移動の距離は短いのに対して、send, throw などは、移動の距離はそれより長い場合が多い。移動の距離が長くなればなるほど、つまり隣接的でなくなればなくなるほど、相手方に届かない可能性は増す。移動の距離は長くても、bring の場合は持ってくるわけであるから当人のところに届く可能性は高い（受け手への隣接性は高い）。但し渡す行為はないので（受け手への直接性が give より劣る）、当人が受け取るとは限らない。promise のように、約束の実行までに時間がある（時間的隣接性がない）場合、その間に実行をやめたり実行ができなくなったりすることもありうる。但し、約束をする時には、have 関係の成立そのものを請合っているのである。具体的なモノを送れる give や sell などに比べると、show, tell などは届くのは映像や音声であって、簡単に届かない状況になりうる。write は、何かを書いたとしてもその行為だけでは移動は起こらない（受け手との隣接性はない）。特定の受け手に郵便で送ったとしても（郵便が介在するだけでも間接的移動）、それが届くとはかぎらない。send も自分が持って行くわけではないので、移動は間接的である。Green （1974）が取り上げた taught は、教えるという行為を行っただけでは相手がそれを have している状態になるとは限らない。show, tell などと違って、耳や目に到達するだけでなく、相手が教えた内容を習得してはじめて have になるので、have までの移動の距離は全体的に長く、隣接性（直接性）の度合いは give よりずっと低い。つまり、移動が完成しない可能性は十分ある。

しかし、このような動詞のフレーム的特徴は、文の含意に寄与しているだけなのか、話者の構文選択にある程度関わっているのか、たとえば、give で二重目的語構文の使用が前置詞構文よりもずっと多いのは、情報構造や重さ要因だけによるのか、それとも所有関係の成立という要因が関与しているのか、あまりすっきりした答は見えてこない。

6．使用域（レジスター）

与格交替構文のどちらを使用するかには、どのような使用域での使用かということが関わってくる。例えば、あるコーパス調査によると、bring や send は、会話という使用域では二重目的語構文の方が多いが、ニュースになると前置詞構文の方が多くなる。[8] tell は会話では二重目的語構文でしか出てこない。tell の前置詞構文は学術分野でようやく出現するが、それでも二重目的語構文の方が多い。[9] 本稿で取り上げている中学校の英語教科書の英語は、詩や歌詞、付随の読み物などは別として、主に会話体あるいはそれに近いお話（軽い物語）の文体である。会話のような場面であれば、tell する相手は既出の人、聞き手に誰だか分かる人の場合が多いのであるから、当然代名詞で示すことになる。そうすると情報の流れから言って、代名詞のような旧情報で軽いものは前の方に置かれるため、二重目的語構文をとることになる。使用域と情報の配置の仕方は深く関わっている。

7．中学校英語教科書における与格交替

もともとシーム項の移行が成功した（have 関係が成立した）かどうかということは、言う必要もない場合もあれば、文脈やまわりの状況から分かる場合もある。従って、所有関係が成立したかどうかの区別を構文によって明示する必要性はあまり高くないと思われる。現実に、二つの構文の間に意味の区別を認めない人もいるのはその証拠である。まして、二重目的語構文という新しい構文を導入し定着させるだけで手一杯の中学校の英語学習レベルでは、コミュニケーション上とくに必要とされないような事項は、当然後回しにするのが得策であろう。

二重目的語構文は、文末位置と動詞直後の位置（間接目的語の位置）というふたつの重要な位置を持っている（文頭位置は別にして）。後者は二重目的語構文のだけの特殊事情であるが、前者は英語の文全般にかかわる位置である。とすれば、中学校英語でまずもって注意を払わなければならないのは、文末要素であろう。言わば、こちらの方が大きい網である。そこで、前掲の3種の中学校英語教科書によって、与格交替の構文選択、とくに二重目的語構文がどのような特徴を持っているか検証してみよう。以下使用例は学年単位で教科書別に示している。使用例をかなり包括的に挙げたのは、使用の実体がすぐ分かるようにするためである。なお、出所を示した（H1/114）は、New Horizon 1, p. 114 を表す。そのほかについても同様である。

8．GIVE

3種類の教科書で一番多く出てくる二重目的語動詞は、予想通り give である。その中では二重目的語をとっている場合の方が前置詞 to をとっている場合よりも倍以上の頻度で使われている。コーパスの調査結果でも、二重目的語構文の方がずっと多い。[10]

<GIVE>二重目的語構文

（1）The spider gave the old woman a beautiful Dream Catcher, and she was happy for the rest of her life. H1/114（付録資料編の Further Reading）

（2）I will give you a card. C2/53

（3）I will give you some examples. C2/53, C2/87

（4）I hope this trip will give me special memories. C2/78

（5）Excuse me, but could you give me some water? H2/32

（6）I want to give you this box in return. H2/33

（7）The old woman gives them a small box. H2/33

(8) But my host mother always gives me too much food. H2/42

(9) I'll give you some medicine. H2/56

(10) "I'll build a new shrine for you. But you must give me the hole." H2/89

(11) It's a kind of greeting. Here, I'll give you an example. S2/40

(12) A: Tomorrow is Takao's birthday. B: Yes, I'll **give** him a birthday card. S2/40

(13) A: What did you give Ai, Jim? B: I gave her a racket. S2/41

(14) B: Oh, really? What will you give her? A: I'll give her a concert ticket. S2/43

(15) My father gave me a new bag. S2/43

(16) I **gave Mary some flowers**. S2/97

(17) I gave Akiko a present. C3/111

(18) "Let's get together and give them some shade," said Daniel. H3/79

(19) That was a wonderful speech/performance. Let's give him/her/them a big hand. S3/5

(20) My uncle gave me this hat. S3/36

(21) What's the best advice that you can give young people? S3/70

(22) He visited them in the fall of 2003 and gave them the balls. S3/86

<GIVE>前置詞構文

(23) I will give a card *to you*. C2/53

(24) My brother Yuji gave it to me. H2/2

(25) You gave it to me. H2/8

(26) The man advertised the hole as a new dump. People gave money to the man and dumped things into the hole. H2/90

(27) I looked very happy in my new kimono. My grandparents gave it to me as a present. S2/44

(28) I gave some flowers **to** Mary. S2/97

(29) She got the stone and gave it to Nanny. C3/39

(30) France gave it to the United States in 1886 as a symbol of friendship. H3/2

使用例に目を通せば分かるように、二重目的語構文においては、間接目的語（受け手）はほとんど代名詞であり、情報構造（旧情報―新情報の順）と重さ（重たい語句を文末）の原則に合致している。(1) のような通常の名詞句でも、冠詞の使い方からだけでも分かるように、情報構造の原則は守られている。(13)、(17) のような友達の名前は旧情報である。(13)、(21) のように左方転移を受けている要素（what）は焦点化されている要素である。従ってもともと文末に

置かれる要素である。なお、二重目的語構文においては、直接目的語は左方転移が可能であるが、間接目的語は左方転移できない。

前置詞構文の方は、代名詞 it が直接目的語になっている例が多い。代名詞 it は旧情報であるとともに、非常に軽い代名詞なので、通常二重目的語構文の文末に置かれることはない。但し、間接目的語も me のような代名詞の場合は、両者とも旧情報で軽い要素となるが、その場合は、文法的関係を to によって明確に示すためと、to があるとそのあとの要素に強勢を置きやすいため、基本的な語順は前置詞構文の方（e.g. gave it to me）である。(23)、(28) の例は、それぞれ（2)、(16) の例と対になっていて、文の対応関係を示すために挙げられているものなので（実際の発話例ではない)、情報構造について云々するには適当な例ではない。(26) の例については、the man 自体は旧情報であるが、前置詞構文の方が接続詞 and 以下の前置詞構文と合致していて均整がとれているし、the man, the hole が焦点化されていると考えられる。

9. TEACH & TELL

上掲 3 種の教科書で、give のつぎに与格交替動詞としてよく出てくる動詞に teach, tell がある。以下使用例は、teach のあとに tell の例を続けて掲げておく。

<TEACH>二重目的語構文

(1) I'll teach him Japanese. C2/55（make/teach/give/write を使っての対話練習）
(2) I'd like to teach you a little Japanese. C2/78
(3) He often teaches me English after school. S2/62
(4) Please teach English. (me) C2/87（括弧の中の語を適当な位置に入れて言う練習）
(5) Koro taught the boys of the village its traditions. C3/39
(6) For example, my teacher taught me how to sign the word 'happy'. C3/71
(7) Miki taught me how to sign. C3/71
(8) But our best friend Michio taught us even more. H3/118
(9) My father taught me how to play it. S3/28
(10) Who taught him how to write stories? S3/29
(11) My grandma taught me how to make sukiyaki. S3/29
(12) At school, even in kindergarten, you teach us how to behave in the world. S3/84
(13) My grandma taught me how to make sukiyaki / what to do next / when to start / where to go. S3/90

<TEACH>前置詞構文

(14) I teach Japanese to Paul. He teaches English to me. We help each other. C1/78

(15) I want to be a teacher and teach Japanese to foreign people. C2/49

(16) And please teach flying to my baby. C2/80

(17) Mother Teresa gathered together some children and taught the alphabet to them. S2/34

<TELL>二重目的語構文

(1) I'm telling you why. S1/112 (巻末資料の英語の歌)

(2) I will tell a story. (you) C2/87 (括弧の中の語を適当な位置に入れて言う練習)

(3) Could you tell me the way to the post office? H3/64

(4) Mom, tell me a story, and then I'll go to bed. S2/43

(5) Ms. Suzuki told us another similar story. S2/91

(6) Excuse me. Could you tell me the way to the post office? C3/7

(7) Eri told her father what to do next. C3/91

(8) Tell me five differences. H3/ 3

(9) Will you tell me how? S3/21

(10) And this morning I couldn't tell you how to react to such questions. S3/28

(11) Please tell me how to say "Ho do you do?" in Japanese. S3/29

(12) I'll tell you how to get to my house. S3/65

(13) Can you tell me how to get to the city library? S3/65

(14) Please tell me how to make sukiyaki / what to do next / when to start / where to go. S3/90

<TELL>前置詞構文

(15) But she didn't tell it to her grandfather. S11/92 (付録)

(16) Each of your photos should tell a story to those who see it. H3/119

(17) He was moved by this story, and told it to his students. S3/86

二つの動詞 teach, tell ともに二重目的語構文の間接目的語のほとんどが代名詞である。代名詞は旧情報で且つ軽いので前の方に置かなければならない。従って二重目的語構文が選択される。直接目的語については、特徴的に how to〜のような wh 句が導入されている。このような句は重たいし、焦点をうけるので、もっぱら、二重目的語構文の文末に配置されることになる。teach の (5) では、its tradition が新情報で焦点化されているので文末に置かれている。ついでながら、シーム項の移動の成就の点で言えば、おそらく男の子が村の伝統を身につけたと思

われる。

二重目的語構文は2年生の教科書で導入されており、1年生の教科書で出ている例は、巻末の付録の物語や歌に出てくる例である。従って1年用教科書の本体のところで使えるのは前置詞構文であって、二重目的語構文の選択肢はまだない。従ってteachの例（14）はこの文型（前置詞構文）しか使えないが、お互いに助け合っている状況（We help each other）なので、Paulとmeが焦点化されていると考えられる。teachの（15）と（16）の例では、リシピアントの方がシーム項より重たい語句で文末に置かれている。説明の難しいのは、代名詞が文末に来ているteach（17）の例である。子ども達がアルファベットを身につけたということまで含意しないために（シーム項の移動のみを表すために）、前置詞構文にしているのか、実際のところは分からない。tellの前置詞構文の方はいずれも情報構造と重さの原則に合致している。いずれも文末要素の方が重たいし、（15）と（17）では、前置されているシーム項は旧情報で軽い代名詞になっている。

10. BRING, PROMISE, SEND, SHOW, WRITE: ASK

上記3種の中学校英語教科書で二重目的語をとっている動詞はあまり多くない。以下、二重目的語を取っているほかの動詞の例を見てみよう。対応する前置詞構文が出てこなかった動詞もあるが、3種の英語教科書だけに目を通した、限られた範囲内での結果である（但しaskはもっぱら二重目的語構文で使われる動詞である）。

<BRING>二重目的語構文

（1）Can I bring you something from Japan C2/78

（2）Some people are working to bring these refugees food and safe water. C3/80

<BRING>前置詞構文

（3）Bring it to me. C3/39

（4）I hurried back home and made a red ribbon for her. Then I brought it to her. S3/37

<SEND>二重目的語構文

（1）I'll do my best to send you some real soccer balls. S3/86

（2）So they sent the Japanese students thank-you letters and a picture of themselves. S3/86

<SEND>前置詞構文

（3）My host family sent it to me. S2/27

（4）<People all over the world make sembazuru and send them to Hiroshima. C3/31>

（5）Without it, we can not send e-mails to each other or look for information on the Web. S3/85

<SHOW>二重目的語構文

（1）What does this map show us? C2/71

（2）Show me your passport, please. H2/13

（3）I will show you her picture tomorrow. H2/41

（4）Shall I show you a bigger one? H2/84

（5）show Mika / a picture S2/41（例にならい show Mika / a picture を使って二重目的語構文を作成する）

（6）Today I'd like to show you two types of tennis: normal tennis and soft tennis. S2/66

（7）I'll show you a trick. C3/ 2

（8）Can you show me another trick? C3/ 3

（9）Well.... Remember, his photo showed the world Sudan's problems. C3/64

<WRITE>二重目的語構文

（1）Ill write her a letter. C2/55（例（I'll sing him a song.）にならって対話練習をするさいに作ることができる文のひとつ）

<WRITE>前置詞構文

（2）I wrote a letter to Tom. S2/13

<PROMISE>二重目的語構文

（1）Promise me three things. C2/80

<ASK>二重目的語構文

（1）Ms Hara, may I ask you a question? C2/64

（2）May I ask you a favor? H2/20

（3）Mike, can I ask you a question? S2/39

（4）May I ask you a few questions? C3/10

（5）He asked me how to swim. C3/91

（6）He asked me how to go there. C3/111

（7）Don't Ask Me That Question! S3/24

（8）Everyone always asks me the same question. S3/25

（9）And please feel free to ask me anything. S3/28

（10）A boy asked me a rude question. S3/32

上掲の bring, send, show, promise, write 及び ask の使用例は、これまで述べてきた語句配列基準（旧情報―新情報の順に並べる、焦点を当てられるもの、重たいものを文末に置く）が大方のところ適用する。以下動詞ごとにふたつの構文を見ていく。

＜BRING＞ 二重目的語構文の 2 例は間接目的語が代名詞（you）と既出情報（these refugees）で、うしろの方に重要な新情報が配置されている。前置詞構文の方は、目的語が it、受け手も代名詞なので、すでに give のところで述べたように、この配列が基本形である。

＜SEND＞ 二重目的語構文の例は 2 例とも、原則どおりに、文末に情報的に新しい、重たい語句を配置している。矢印括弧をつけてある前置詞構文の二番目の例は、移動先が場所で人ではないので、本来例示しなくてよい例であるが（もともと移動先が場所の時は二重目的語構文がとれない）、参考のため挙げておいた。ほかの 2 例の一つは、(sent) it to me という基本的並べ方である。ここでは明らかに me と it の間に所有関係が成立しているが、前置詞構文の語順が優先することになる。前置詞構文の 3 例目では、文末に来ている each other は、同じ代名詞でも you, me のような代名詞と比べるとずっと重い要素である。

＜SHOW＞ 普段の会話では二重目的語構文で使われることが圧倒的に多い show は、3 種の中学校英語教科書でも集めた例は、みな二重目的語構文であった。間接目的語はほとんど代名詞であるし、文末には新情報で間接目的語よりも重たい語句が来ている。代名詞ではない（9）でも、文末要素の方が先行の間接目的語より重い。（5）の Mika は友達の名前ですでにお互いが共有している情報である。

＜WRITE＞（1）の文は、これが直接会話の中で使われているわけではないが、例にならい、与えれた語句を使って作ると出来る文のひとつである。この文もこれまで考察してきたものと同じように、英語の語句配置の原則を守っている。前置詞構文の方の例（2）は、対話練習の中の例文とし出てくるものであるが、下線部の入れ替え候補として play a video、walk my dog が挙げられていることからも分かるように、こちらは目的語がひとつの構文の練習問題で、二重目的語構文は意図されていない。事実、教科書のこの段階では、まだ二重目的語構文は導入されておらず、二重目的語構文は選択肢の中に入っていない。つまり、この段階では前置詞構文のみ可能なのである。

＜PROMISE＞ 二重目的語構文の例は1例だけなので、この例についてのみしか言えないが、これも間接目的語が代名詞になっていて、これまで検討してきた例と同じである。

＜ASK＞ ask は現在ではもっぱら二重目的語構文で使用される動詞で、教科書でも分離の of を使う前置詞構文は当然のことながら出てこない。このような of の用法は大学生にとっても分かりにくい用法である。3種の教科書に出てきた ask の二重目的語の文ではいずれも間接目的語が代名詞になっていて、これまで見てきた傾向と一致している。

11. 終わりに

二重目的語構文の例文を集めたのが3種の中学校英語教科書だけで、非常に限られたコーパスであるが、それでも与格交替の構文選択がどのように行われているか、使用例から大体の状況は見ることができた。与格交替においても文における語句配置の原則に合致するように構文の選択が行われているというのは、当然と言えば当然の結果であるが、中学校の英語の先生方が、自分の使用している教科書でこの結果を検証し、さらに考察を拡げ、コミュニケーションの場で生徒が適切な構文選択を行える指導に繋げてもらいたい。なお、to を用いた前置詞構文には、文法関係が形の上で明示されるという二重目的語構文にはない利点があるが、その理由で前置詞構文の方を選択したという例は、シーム項とリシピアント項の両方が代名詞の場合を除いて、見当たらなかった。使う文が簡単な中学校段階では、前置詞構文によって文法関係を明示する必要性はあまりないと思われる。

注

1. Rappaport Hovav, M. & B. Levin (2008) "The English dative alternation: The case for verb sensitivity" *Linguistics* 44.
2. Cf. Huddleston, R. & G. K. Pullum (2002: 310, n. 66), Rappaport Hovav, M. & B. Levin (2008: 145, n. 11).
3. *New Crown* 2, p. 53, *Sunshine* 2, p. 97 を参照のこと。
4. Cf. *New Crown* 2, p. 87. なお、*New Crown* 3, p. 71 では、＜「どのように～するか（人）に教えます」などと説明するとき＞として how to sign を間接目的語のない形とある形で示している。
5. Cf. Huddleston, R. & G. K. Pullum (2002: 245).
6. 二つだけ挙げておくと、Leech, G. & J. Svartvik (1994: 194ff.)、Biber, D. et al. (1999: 927ff.)。
7. Leech, G. & J. Svartvik (1994: 199).
8. Biber, D. et al. (1999: 390)
9. Biber, D. et al. (1999: 388)
10. Biber, D. et al. (1999: 928 (Corpus Findings))

引用文献

Arnold, J. E. et al. (2000) "Heaviness vs. Newness: the Effects of Structural Complexity and Discourse Status on Constituent Ordering," *Language* 76. 1.

Biber, D. et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education Limited.

Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.

Green, G. M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press.

Huddleston, R. & G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.

Leech, G. & J. Svartvik (1994) *A Communicative Grammar of English*, 2nd ed., Longman Group Limited.

Rappaport Hovav, M. & B. Levin (2008) "The English dative alternation: The case for verb sensitivity," *Linguistics* 44.

中学校英語教科書

高橋貞雄他 (2008)[3] *New Crown 1, 2, 3* 三省堂

笠島準一他 (2006) *New Horizon 1, 2, 3* 東京書籍

佐野正之他 (2008)[3] *Sunshine 1, 2, 3* 開隆堂